

## 【日程】

2023年6月28日（水）

## 【調査項目】

・名古屋市立山吹小学校の「誰一人取り残さない取り組み」

名古屋市立山吹小学校は、2023年4月現在、児童数657人23クラス。開学150年を迎える、名古屋市内で最も古い学校で「町並み保存地区」に位置する。

・名古屋市立山吹小学校 校長 山内 敏之（やまうち としゆき）

『夢中になって目を輝かせる子どもたち』を目指す。

すべての子どもにそんな教育を届けることが、学校の使命だと考え、その実現のために、民間事業者<一般社団法人日本イエナプラン教育協会>のもつノウハウを活用しながら、子どもたちの「主体的に課題解決に取り組んでいる姿」や「クラスや同じ学年の仲間だけでなく、異なる学年のメンバーの中で、互いに認め合いながら、自分のよさや個性を生かし、協働している姿」を目指し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現する学校づくりを進めている。

「YST（山吹セレクトタイム）」と、呼ぶ学習時間があり、児童たちは週間計画に基づいて、いつ学ぶか、何を学ぶか、どのように学ぶかを選択する。教師は児童一人一人の進捗を把握し、サポートに徹する。YSTは、週に半分弱ほどで、後半は一斉授業となっている。

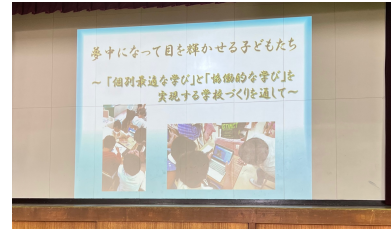
教室の端に座る子もいれば、廊下で学習する子どもたちも居る。分からないところは周囲の子に頼る。互いを尊重し合う。

「一部の特別な教員がいるからできるのではなく、公立の普通の学校でもすべての教室でできる」他校が取り入れやすい実践を意識し、「そのまま真似をするのではなく、イエナプランのいいところ取りをしている」とのこと。

児童は週計画と単元進度表を基に教材等を選択し、学習計画を立てる。週の終わりには自己評価による振り返りをする。以前の子どもたちは勉強はやらされるものという意識があったが、現在では、子どもたちが進んで学ぶ姿を見て、教職員も手応えを感じている。不登校に関しても、現在、全く学校に来れないという児童は1人もいない。

明治5年以降から150年続いている日本の一斉授業は、同じ年齢の子に同じ内容を同じペースで進む。当時は大人を含め、同じ方向を向くために必要なシステムだった。だが、習熟度の違いについてこられない子どももいる一方、つまらないと考えることをやめてしまっている子どもも見逃してはならない。一斉授業という枠を取り払う事ができれば、今まで悩んでいた事を解決する事ができると校長は考えた。

文科省中央教育審議会は、「令和の日本型学校教育」を発表。いじめや不登校、学習意欲の低下など、画一的な教育では解決できない多くの課題を認識した上で、指導の個別化と学習の個性化、探



思い思いの場所で学ぶ子どもたち。

究的な活動や体験を通じて他者と協働する学びなどを掲げる。  
これを受け、多くの自治体や学校がイエナプランに注目している。

・オランダで発展した「イエナプラン教育」について

子ども一人一人が尊重され、主体的・協働的に学ぶ手法やコンセプト、異年齢でクラスを編成するスタイル。文部科学省が掲げる「令和の日本型学校教育」として全国で注目されている。

<日本イエナプラン教育協会> [www.japanjenaplan.org/jenaplan/rule/](http://www.japanjenaplan.org/jenaplan/rule/)

「YAP（山吹アドベンチャープログラム）」ふれあい活動。  
学級作りが要となるため、まずは仲良くなる事が必須である。みんなでゲーム等、ふれあいを大切にしながら継続的に行っていく。年齢に拘らず、違いを認め、互いを尊重し、行動につなげることに役立つ。今後様々な人たちと出会うことになるが、個性を持った人たちに会い、その集団の中で自ら力を発揮し、社会へ貢献していく力を養う。探究活動を続けられる関係を構築する。

通常、学校では1、6年のペアは多い。思いやりと優しさは育つが、年齢が離れすぎていると話し合いは難しい。

1、2、3年と4、5、6年の組み合わせの中で、3年生、6年生がリーダーシップを取る。小学校6年間で、リーダーを2回経験できるというメリットがある。

3年生の時間割表

<新しい学校づくり推進部の創設>

名古屋市の、行政あげての「名古屋スクールイノベーション事業」において、これまでの教育制度を含め、不十分であった所にメスを入れる事となった。海外や国内の先進坑の視察、学習会の実施と、民間事業者の持っている知識やノウハウを生かしてのマッチングプロジェクトが始まり、「新しい学校作り推進部」が創設された。2019年8月、教員8人をオランダでの研修に派遣。本国から研究家を招いた大規模な勉強会も開催。本年度は、民間事業者と組んで学校の課題解決を図る「マッチングプロジェクト」の一つとして、山吹小で一般社団法人日本イエナプラン教育協会による教員研修を行っている。個々に合わせて進める授業では、発達障害の児童や、同じ事を一斉にやるのは苦手な子どもも引け目を感じる必要がない。現在では、子どもたちの表情が変わった。

また、教員の負担も減ったとのこと。保護者らは、自習時間のような取り組みに、最初は戸惑いもあったが、子どもたちの表情や成長を見て理解を深めてもらえるようになったとのことだった。

【所見】

子どもたちが生き生きと主体的に課題に取り組んでいる姿には頼もしさを感じた。このスタイルならば、一斉授業のみを受けるより、将来、社会に出た時にも互いに認めあいながら、自分の良さや取り組むべき課題にも気づき、個性を生かしながら協働できよう姿も想像できる。

時代の流れの中、学校教育の目指す方向にはこのような考え方が必要だと感じる。日本においてはまだまだ目新しい取り組みで不安とを感じるかもしれないが、海外では既に定着している事もある。

不登校問題、個々にあった学びの実践、また、教員の負担軽減のために、同校のような取り組みを進めるべく、教育委員会、校長、特に教員らの早急な意識改革が必要であると考えます。